相談課便り

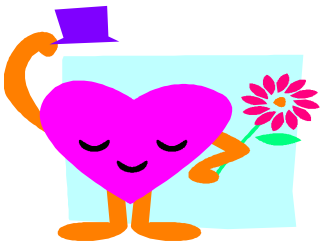
＊第64号

岡山県立岡山朝日高等学校
教育相談課
令和３年３月発行

１年を振り返って今年度はどうだったかと考えると，すぐに「コロナの関係で例年通りの活動が出来なかった」と思ってしまう。実施方法などを工夫して行事を実施していても，どういうわけか例年ほど効果が上がっていないように感じてしまう。おそらく今までのレベルを下回ることがゆるされない，努力不足だと感じてしまうのだろう。考えれば考えるほど，どんどん気持ちは重くなってしまう感じがして，今年度の反省もなかなかまとまらない。

そもそも日本語は否定で表現することが多いと聞いたことがある。「寝坊しないように」「間違えないように」「廊下は走らないように」など，すぐに思いつく表現は否定のものが多い。ところが「風邪をひかないようにね」という否定の日本語を英語で表現する場合，“Be careful not to catch a cold.”のような否定を使った表現はどうも英語話者には好まれないらしい。もちろんこれは英作文の授業では正解となる。しかし英語話者は，”Keep warm.” 「温かくしておいてね」という表現をよく使う。同じように，「最終電車に乗り遅れたらダメよ」は” Don’t miss the last train.”ではなく” Try to catch the last train.”と表現される。言葉は文化を反映すると言われるが，「調和」を大切にする日本文化では，その調和を乱すことは良くないという意識が強いのかもしれない。だから「～しないように」という表現になる。逆に様々な文化背景をもつ人が使う英語は，その文化を担う個人や文化の多様性を認める肯定的な態度が必要なのだろう。そう言えば，友人のアメリカ人が，キリスト教徒でありながら日曜日に教会に行かないことを疑問に思って，なぜ行かないのか聞いたことがあるが，彼は「教会に来て欲しいと神が望むなら，神が自分を朝起こしてくれればよい。」と言っていた。（しかしこの発言は彼が人並みはずれたおおらかな性格だったからかもしれない。）英語の教員であっても，残念ながら日本語の考え方から逃れることは難しく，口をついて出てくる表現は否定の表現が多いような気がする。英語話者のように，肯定的な見方を身に付け，肯定的に話すためには，まだまだ修行がいるようだ。

そんなことを思いながら，来年度はどうするべきかを考えてみた。具体的な目標はさておき，生徒に関しても，教員に関しても多くの笑顔が見られると良いなと思う。やるべきことをしっかり考えることは大切だが，自分が出来ていることを肯定的に受け入れること，競い合う人がいてもいいが，自分自身の成長を肯定的にみることが必要だろう。日々の生活は忙しく，思い通りにもいかず，つい他人や自分自身に対して否定的な見方をしてしまいがちだが，「大丈夫だ，きっとうまくいく」という自分自身への声かけをして，「にっこり」を忘れないようにしたい。教育は「教えて育むこと」と言われるが，「育む」というのはその人の笑顔を守ることかもしれない。



自転車タイムトリップ　　内田　康晴

60 歳を過ぎ，健康のために自転車を手に入れて乗り始めた。自転車を買ったのは，高校生のとき以来である。久々に自転車に乗ってみると，実に新鮮で快適であった。土曜日に約 12 ㎞の道のりを約 1 時間かけて学校に来たり（決まった時間内で確実にたどり着ける自信がないので平日の通勤はムリ），日曜日の午後に近所を乗り回したりした。まるで小学生である。（「まるで昔の小学生」というべきか？最近の小学生は，そんなことはしないで家でゲームしていたりするのかも）

あらためて驚きだったのは，車で通る道と，自転車で通る道は全く異なるということであった。

家からほんの二～三百メートルの所でも，自転車で通る小道は，小学校時代以来，半世紀の間足を踏み入れることのなかった場所だったりしたのだ。50 年たっても，田んぼと畑と家の間を縫う小道は基本的に変わっていない。住む人の世代が変わって，家が新しく建て替わっているところもあるが，変わらない部分が，隅々に見られ，まるで小学生時代にタイムスリップしたかのような気分になった。小川でフナやザリガニをとったりして幸せに過ごしていた日々のことや，仲間外れにされて辛かったときのことなどが，よみがえってきた。

別の日に，中学生の時に好きだった女の子が住んでいた家の近くを通りかかったときは，当時の彼女の可憐な容姿の記憶とともにその子に対して抱いていた感情が懐かしく思いだされた気がした。

さらに別の日には高校のときの通学路のほうに行ってみた。新しくできた大きな道路や野球場に寸断されながらも，その間に残る 10 ㎞弱の道をたどることができた。おおむね自転車と車一台がやっとすれ違えるくらいの細い道でペダルをこぎながら，よみがえってきたものは，あのころの自分の胸に淀んでいた重苦しい感覚だった。なぜあんなに重苦しかったのか？毎日やらなければならないと思いながら，さほどにはやれていなかった勉強のせいだったのか？（割と情けない高校生だった！）あるいは，将来への不安のせいだったのか？いずれにしても，高校時代の私が慢性的にさいなまれていた重苦しさが，昔懐かしい通学路の両側の景色の中で再び湧きあがって来るのであった。

後年，思い描いていた夢が破れて高校教師として就職したとき，逆に妙な安心感のようなものを感じたのを覚えている。実業高校という未知の世界で苦労することになるのだけれど，それを前にした緊張や不安もあった一方で，高校時代以来ずっと自分の中に垂れこめていた深い不安感がすっと消えたのをはっきりと記憶している。それが良いことか悪いことかわからなかったが。

定年を迎えて手に入れた自転車は，思いがけないことに，忘れていた過去の生活の場所へ身を運び，忘れていた感情を呼び覚ますタイムマシンなのであった。

「関係」について　　中野　正勝

最近すごいなぁ，と思った言葉に，人間の定義は「関係が関係それ自身に関係すること」(キルケゴール)というのがありました。

“ ？ ”という感じなのですが，作家の高橋源一郎氏が明治学院大学(国際文化学部)で行っているゼミに招かれていた哲学者鷲田清一氏(前大阪大学学長，現京都府立芸大学長)が，講義中に紹介した言葉です。(『読んじゃいなよ！』岩波新書)

何だかすごいな，と当の鷲田氏も言っていましたが，僕もそう思いました。

人間は「間柄的存在」(和辻哲郎)ですし，「社会」というより日本の場合「世間」(阿部謹也)の中で生きているので，特に，と思いました。

コロナ禍で，皆マスクをして「ソーシャル・ディスタンス」（これも関係が関係に関係してゆきます）が必要とされ，今日これらのことが教育現場をはじめ，社会の課題として大きく「関係」してきた気がします。

昨年，朝日祭は「関係」する人たちの凄まじい努力によって成功裏に実施できました。新たなクラスや集団の中での「関係が関係に関係」してきました。そのことで，クラスの人間「関係」，友達「関係」に「関係」の変化がみられました。「関係に関係」してきたのです。どうでしょうか。しかし一方で，修学旅行はなくなり，1 年のスキー実習もできず，百人一首大会も決勝は少人数で実施しました。「関係が関係に関係」してゆきそうです。そして，それが人間の定義に「関係」してゆく可能性があります。

どうなってゆくのだろうか。新しい生活様式と人間「関係」？

でも，ピンチはチャンスなので，その中で全く新しいイノベーション(技術革新)が進みつつあるかもしれません。20 世紀末の不況の中から IT が，リーマンショック後に AI が，といった感じです。お家(おうち)時間が長くなる中で，これまで外の「関係」に忙しく自分自身との「関係」を深めることができなかった人たちが，外の「関係」に引きずられてできなかったことや考えられなかったことに挑戦し，深める。何か新しいものが生まれる。・・・そういった側面もあるのかな，と思います。(アメリカでは，実際新規の起業がコロナ禍で増えました。）これも又，「関係が関係に関係」してゆく中で起こりうることなのでしょう。

このように考えてゆくと，コロナ禍でも何か新しい「関係」にワクワクし，さらにその新しい「関係」に繋がる契機も，隠されているように思えますが，いかがでしょうか。

（やっと「相談課だより」っぽく「関係」づけられたかな？）

「とってもラッキーだわ！ありがとう！」　　高塚　夏恵

某空港旅客カウンター。年配の外国人女性がやってきた。羽田空港を経由してフランスに帰国するとのこと。手続きを進めるために，私はチケットとパスポートを確認する。

予約記録を探すが，見当たらない。便が間違っているのか。航空会社を間違えているのか。日付を間違えているのか。何度も確認するが，わからない。お客さまも不安そうな表情だ。

通常とは別のシステムからチケット記録をもう一度確認してみる。・・・なんと，予約が羽田経由から，ソウル経由に変わっていた。利用する航空会社も変わっていた。予約がないに決まっている。乗継便の遅延により，航空会社側が予約を変更したらしい。通常はお客さまに通知されるはずだが，手違いか，お客さまは全く知らずにこちらのカウンターにやってきたのだ。

さて，どうやってお客さまに伝えよう。英語でどう言おう。怒られるだろうな。困ってしまうだろうな。すでに長時間待たせてしまっているし。・・・。でも，伝えないと。ソウル行きの飛行機の出発に間に合わせなければ。私は恐る恐るお客さまに事情を伝えた。どんな反応をされるかとても不安だった。

「ソウル！私，ソウルに行けるの？今まで一度も行ったことないの！とってもラッキーだわ！ありがとう！」

意外な答えでびっくりした。怒られるとばかり思っていた私は，なんと返事をしていいのかわからなかったが，とても救われた気持ちだった。

接客の仕事は楽しい。同じ書類を用意しても，「早くしてくれよ」と厳しく言われる場合もあれば，「ありがとう。助かったよ。」と感謝される場合もある。毎日，年齢も性別も国籍さえも違う人の考えに触れられる。怒られるとあまり気分がいいものではないが，たまたまイライラしていた時かもしれないし，人生そんなときもあるよなーと，なんとか肯定的に捉えるようにしている。ただ立っているだけで，制服を着ている私に向かって手を振ってくれる子どもたちは最高の癒しだ。様々な事情でみんな飛行機に乗っている。そんな人たちが乗りこんだ飛行機に，大きく手を振って見送る瞬間，それは幸せな瞬間だった。

空港の仕事を離れて一年。空を見上げるたびに思う。今日も素敵な一日をありがとう。

挫折　　安藤　七彩

将来に向けて頑張っている朝日高生を見ていると自分の高校時代を思い出すので私の昔話をしようと思う。

私は中学から部活動でハンドボールをしていた。運動は嫌いだったが友人に誘われ，断り切れずに入部した。しかし，中１の頃から試合に出してもらい，中３の時にはエース・キャプテンをし，岡山県選抜に選ばれたりもして，楽しくて仕方がなかった。当然，高校でもハンドボール部に入部した。高校でも頑張ろうと思っていた矢先，同学年の部員は全員スタメンに選ばれ，私１人がメンバーから外れた。今までしてこなかった，選手のドリンク作り，練習試合ではコートの隅でフェイント練習，自分の能力に見合っていなかった高いプライドはひどく傷つけられ，腐りかけた。私はこのとき初めて挫折を経験した。

私の学年が主力になったときには，一緒に入学した部員とはもう１年の差がある。しかし，腐ることも許されない環境ではひたすら頑張るしかなかった。頭の中は不安と焦りでいっぱいだったが，なんとか試合に出られるようになった。腐らずに頑張って良かったと思った。

高校最後の大会。私たちは準決勝まで残った。後半ラスト 40 秒，16－17 で負けている。監督からサインプレーの指示が出た。私は関わらないプレーだ。「自分がシュートしなくていい，良かった！」とつい安心して気を緩めてしまった。その瞬間私にパスが来た。私はびっくりしてキャッチできなかった。ラスト５秒。ボールを取りに行っても間に合わない。何もできず転がるボールをただ見ていた。試合終了のブザーが鳴った。１分前に戻ってほしいと何度も思った。高校最後の試合は私のミスで負けた。部員達は私のせいではないと言うが，私は今でも自分のせいだと後悔している。

最後の大会で負けた瞬間は，高校に入学して味わった挫折も，死んだ方がマシだと思った走りこみも，全部無駄だったと当分落ち込んだ。しかし今では，こんな高校時代の経験のおかげで，少々何があってもへこたれないメンタルを身につけることができたのでよかったと思っている。結果はどうであれ，頑張った時間は自信になる。これからも，人生うまくいかないことも多いと思うが，今までの挫折や後悔を自分の糧として強く生きてゆきたいと思う。